

青森県立保健大学広報誌 活彩！保健大学だより

vol. **40**
2018 夏

Campus Magazine



青森県立保健大学 開学20周年記念増刊号 **前編**

20th Anniversary

健康とともに20年
～未来につなぐ地域の健康～



「輝く仲間」 梅原正夫作



開学20周年に寄せて

青森県立保健大学 理事長／学長 上泉 和子

本学は、「青森県に保健医療福祉の大学を！」という、県民の皆さまや専門職の皆さまの熱い思いからできた大学です。おかげをもちまして、20年目の4月、学部卒業生は3,200人、大学院修了生は220人をこえました。初期の卒業生は中堅として活躍する年代になりました。卒業生／修了生、後援会の皆さま、地域の皆さま、たくさんの方々はこの大学を育てていただきました。20年という時がもたらしてくれたこと、その重さを感じています。ご支援していただいたたくさんの方々へ改めて感謝申し上げます。

この20年間、東日本大震災による被災、いくつかの事件など、大学の危機管理を問われる出来事がありました。東日本大震災では一般入試後期日程や卒業式ができませんでした。実家が被災した学生もおりましたが、とにかく全員無事であったことは幸いなことでした。平成30年には刑事事件や教員の逮捕事案など、学生をはじめ教職員、県民の皆様にも多大なるご心配をおかけすることが起こりました。

大学としてまずは再発防止に努めることが最優先すべきことですが、加えて影響を最小にする“備え”をすることにも力をいれていかなければなりません。起こってしまったことは不幸なことでしたが、このことを教訓に、危機的状況で大学が何を考え、何を行動してきたかを伝えていかなければならないと思っています。大学はどんな時も隠すことなく、正面から篤実をもって取り組んできました。許されないことはとことん戦います。寛大であるべきところは広くとらえて取り組みます。全霊で注ぐ本学の組織風土を大事に、今後も伝えていきたいと思っています。

平成30年4月、青森県立保健大学将来構想～地域の“健康と福祉”の未来をリードする大学を目指して～を、発出しました。開学20年をひとつの節目とし、地域における保健医療福祉の知の拠点としての役割を果たしていくために、重点的に取り組んでいく施策を取りまとめ、将来構想を定めたものです。社会情勢はどのように変わるのか、先が見えないところも多々ありますが、そうであるからこそ、基軸から離れない、そして中庸の精神をもって進んでいけたらと思っています。

「保健大学は保健医療福祉の道を志望する人たちそして県民の希望である」と言っていたことがありますが、これからも保健医療福祉をリードする地域の大学として、がんばっていきます。ぜひ力を貸してください。そして保健大学をどうぞかわいがってください。



開学20周年に寄せて

青森県知事 三村 申吾

青森県立保健大学が、開学20周年を迎えられますことを心からお喜び申し上げます。

青森県立保健大学は、地域住民の健康と生活の質の向上に資することを目標に、平成11年4月に開学し、これまで、人間とは何かを理解し、病気や障害を持つ人々の心の痛みを感じる思いやりと温かさを持って接する「ヒューマンケア」を実践できる人材の育成を進めてきました。また、より高度で専門的な職業人と研究者を育成するため、平成15年4月には大学院博士前期課程、平成17年4月には博士後期課程を開設し、多くの人材を輩出するとともに、本県の抱える課題について、官学連携等による研究に取り組むなど、本県の保健、医療及び福祉の推進に貢献してきました。

さらに、平成20年4月には、県民の健康の増進と食育活動を担う人材を養成するため栄養学科を新設するとともに、より地域に根ざした大学を目指して、公立大学法人に移行し、組織力の強化と教育内容の充実を図ってきたところです。豊かな人間性と専門性を持った人材の育成と地域社会への貢献に真摯に取り組んでこられた、上泉理事長をはじめ、関係者の皆様のこれまでの御尽力に深く敬意を表します。

さて、青森県では、「健康で長生きな青森県」を目指し、「今を変えれば！未来は変わる！」のスローガンのもと、全県的な健康づくり運動を展開しているところです。

また、2025年以降の超高齢化時代に向けては、保健・医療・福祉の分野にとどまらず、買い物や食事、住まい、移動などといった生活機能の確保や提供が今後の大きな課題になると考え、市町村や多様な担い手と連携しながら、県民の誰もが、地域で生まれ、地域で育ち、地域を助け、地域で安心して老後を迎えることのできる「青森県型地域共生社会」の実現を目指し、様々な取組を進めています。

貴学におかれましては、開学20周年を契機に、地域の特色を生かした高等教育機関として今後さらに30年、40年の歴史を刻み、本県の保健、医療及び福祉の推進に大きく寄与されますことを御期待申し上げます。

結びに、青森県立保健大学のますますの御発展と、関係者の皆様の御健勝、御活躍を心からお祈りし、お祝いの言葉といたします。



開学20周年に寄せて

看護キャリア支援塾代表 **新道 幸恵**
(初代学長)

開学20周年記念式典における卒業生や在校生のスピーチに感動しました。卒業生によって生き活きと語られた経験はそのまま、青森県立保健大学の歴史を物語るものであると同時に大学が卒業生を世に送り出してからの約16年間の保健医療福祉の変革を示すものでした。青森県立保健大学は当時の県立大学としては珍しい看護学科、理学療法学科、社会福祉学科の3学科で構成される健康科学部1学部によって開学されて以来、年次進行につれて、修士課程、博士課程を発足されました。スピーチに登壇された卒業生の中には博士課程の修了生もおられ、病院での勤務の後に保健医療福祉行政の場で力を発揮されている様子がうかがわれました。我が国の急激な少子高齢化を背景に、保健医療福祉の変革は加速し、平成12年には介護保険法が制定され、チーム医療の推進、在宅ケアの推進、地域包括ケアの発足等によって、保健医療福祉の分野では看護師、理学療法士、社会福祉士等のコメディカルの専門職には、連携協力して活動していくことが求められるようになりました。そのような変革の真っ只中にある職場の第一線で中堅職員として活躍している卒業生の姿が目につきました。

在校生のスピーチからは、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科と平成20年に開学した栄養学科の4学科の共同学習とその魅力が伝わってきました。その学習の成果は、地域包括ケア時代に必須である多職種協働を効果的に推進する役割を果たすことにつながると思います。そのような学習を経て卒業した人々の将来がとても楽しみになりました。

式典及び祝賀会で出会った方の中に、開学当初に事務職員として活動していて再び大学に異動し事務部門の役職を得て働いておられる方がありました。このような人事は発足から10年余り経過した独立行政法人化の成果なのでしょうか。私がかねがね、大学には大学教育を専門とする事務職員が必要であると考えていましたので、事務職員の人事がとても良い方向に変化しているように思えました。

保健医療福祉の人材育成を目標にする大学が増加している今日、大学の運営は難しさを増していることと思います。しかし、開学以来20年間に蓄積された実績を元に、県立大学としての地域貢献への使命を大切にすることで、時代の変化を先取りした効果的な人材育成、研究開発によって、ますます発展されることを開学に関わった一人として、期待しています。



開学20周年に寄せて

協和発酵キリン取締役 **リボウイツツ よし子**
(第2代学長／初代理事長・学長)

開学20周年おめでとうございます。既に3,200人学部卒業生と220人を超える大学院修了生を社会に送りだせたことを大変誇らしく思います。

私と青森県立保健大学（AUHW）との絆：アメリカに30年近く在住していた私にライダー島崎玲子先生より突然AUHWへのお誘いのお電話をいただきました。新道幸恵初代学長の熱意に動かされ、大学院設立の為2002年10月に米国から着任しました。その後2003年看護学科教授・国際科長として国際科のグランドデザインを実行し、2006年看護学科長・国際科長を歴任、2007年には法人化前の学長、2008年から2014年3月まで公立大学法人青森県立保健大学（AUHW）の初代理事長・学長を務めさせていただきました。めまぐるしくも当時の興奮と情熱を思い出します。

数年の予定で来日した私にとって11年半の滞在は、驚きであり多くの教職員や地域の方々を支えられ貴重な役割を担わせていただき心より感謝申し上げます。

大学法人化：私の役割は、柔軟で機動しやすい組織・運営の仕組み創りと、更なる飛躍をめざして、必要事項を中期計画に盛り込み実現に向けて着実に諸運営の在り方を整理し実行・評価をすることでした。米国での組織改革の経験を活かし私の職業上の集大成として、良いと思われることは全て取り入れる姿勢で向かいました。夜中に良い案が浮かぶと書きとめ、既に用意したTO DOリストに加え朝が待ちきれないことも今は良い思い出です。お陰様で、第一期中期計画終了時は、良い評価を青森県地方独立行政法人評価委員会及び三村申吾知事よりいただき感謝しております。

東日本大震災：多くの尊い命を失った自然の脅威と大学の危機管理が改めて問われた時でした。幸いにも2日間で学生・職員の安否確認が取れました。看護学科には災害看護論がありましたが、後に4学科共有の災害援助論をカリキュラムに導入しました。本学に比較的近い岩手県の野田村を対象に4学科でチームを組み、学生・教職員共に持続的援助を行ったことは、本学の生きた教育理念の実行でした。

障害者ケア付きねぶた：中期計画の良き伝統の構築として、既に地域の医療福祉関係者及び一般住民で支えられているケア付き青森ねぶた“じょっぱり隊”に本学も参画させていただきました。今は、大学の取り組みとしてカリキュラムに生まれヒューマンケアリングとボランティア精神の醸成となり素晴らしい生きたケアリングの学びとなっています。本学の良き伝統として受け継がれてゆくことを願います。「ヒューマンケアを提供する専門職の人材育成」という教育理念は、今後とも本学の礎となり発展してゆくことを願います。

青森県立保健大学の更なる飛躍を願いつつ、いつまでもエールを送ります！



開学20周年に寄せて

一般社団法人公立大学協会 会長 **郡 健二郎**
(名古屋市立大学長)

青森県立保健大学が開学20周年を迎えられますことを心よりお祝い申し上げます。

青森県立保健大学は青森県民からの多くの期待や要望に支えられ、平成11年に開学されました。これまで20年にわたり、青森県の保健医療・福祉に対するニーズに応える中核的存在として、地域の医療現場で活躍する人材の輩出を行ってこられたほか、教職員の皆様が一丸となり教育・研究・地域貢献において、着実な成果を挙げてこられました。これまで大学の設置や運営に携わってこられました教職員、青森県、そのほか関係するすべての皆様のご尽力に心から敬意を表します。

地域に貢献する活動の一つとして、青森県立保健大学は「健やか力（ヘルスリテラシー）向上プロジェクト」に取り組んでおられます。このプロジェクトは、青森県民の健康に関する重要課題である、生活習慣病による高い死亡率や短い平均寿命などの解決に向けて、新カリキュラム導入による地域ヘルスリテラシーを向上させる人材の育成、地域住民のヘルスリテラシー向上に向けた公開講座等の実施、ヘルスリテラシー関連の研究成果の社会への還元、図書を通じた普及啓発活動など、大学の専門的知見や資源を有効的に活用して取り組んでいる活動であります。さらにこの取組においては、公立大学学生ネットワークLINKtoposの活動に参加した学生が青森県のヘルスリテラシー向上に寄与する活動の実践と併せて、他大学や他地域で行われる活動に参加し、情報収集等を行うことが紹介されており、学生の自主性を尊重しながら進めている取組であることがわかります。こうした活動は、地方自治体が設置する公立大学の存在価値を高める全学的な活動として、高く評価されるものであります。

地方自治体が設立する公立大学は、現在、全国に92大学となり、国立大学を上回る数となっております。公立大学はそれぞれの設立自治体と共に歩みつつ、全国の公立大学と横の連携を深め、共に成長する関係を持っていることが特徴であり、公立大学協会としても、青森県立保健大学の20年間の実践に学び、青森県立保健大学と多くの公立大学との絆を深め、会員校が一丸となって公立大学の発展のために尽くす所存です。青森県立保健大学が今後なお一層のご発展を遂げられますよう、公立大学協会を代表いたしましてお祈り申し上げます。



開学20周年を迎えて

後援会会長 齋藤 勝博

後援会会員の皆様には、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今年度より後援会会長を務めさせていただくことになりました齋藤です。

本学は、平成11年の開学以来、今年で20周年目を迎えました。

本学は、「ヒューマンケアを実践できる人間性豊かな人材の育成」のもと、社会に寄与するため、実践的な社会人育成に向けた専門性の高い大学として着実にその存在感を高めてきております。また、今年は、「健康とともに20年～未来につなぐ地域の健康～」を20周年のテーマとして掲げ、地域の健康と福祉の未来をリードする大学として、その存在感を高めてきております。

後援会では、新入生研修や学生の福利厚生、大学祭やサークルなどの活動、卒業研究の助成等、学生が大学に入学してから卒業するまでのさまざまな場面で学生に対して支援を行っております。平成28年には、本学三味線サークルが津軽三味線日本一決定戦で優秀な成績を収めました。また、平成29年には、本学発達保障研究会サークルの活動「飛び出せ！オープンカレッジin青森」が、障害者の生涯を通じた多様な学習を支える活動として、文部科学大臣表彰に選ばれたりといろいろと活躍していました。

後援会会員の皆様のご理解とご協力のもと、後援会では、これからも学生の成長を温かく見守っていきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

このたびは、開学20周年誠におめでとうございます。

津軽三味線サークル



平成28年5月に開催された「第10回津軽三味線日本一決定戦(種目・部門 団体りんごの部)」では準優勝(左写真)、今年は3位をおさめました。(右写真)

発達保障研究会サークル



平成29年10月「飛び出せ！オープンカレッジin青森」が、障害者の生涯を通じた多様な学習を支える活動として、文部科学大臣表彰に選出されました。

20周年を迎えて ～地域の健康を支える看護を目指して～

学科長 鳴井ひろみ

看護学科では、これまでに1,729名の卒業生を輩出してきました。現在、看護系大学は全国に266校あり、右肩上がりが増え続けています。その中で、本学のカリキュラムは、これからの地域包括ケアの時代に向けた地域に根ざした看護教育において、先駆的な取り組みを行っている16大学の1つに選ばれ、地方の特色ある教育の取り組みを評価していただきました。

今後は、地域で生活している人々の健康を支える看護を目指し、“青い森のカリキュラム”を通して、より一層地域の魅力を理解できるよう、地域と共に考え、共に育っていく環境を提供し、ヒューマンケアを実践できる看護職者として成長できるよう支援していきます。さらに、在学中から就業後も看護職者としての総合力修得とキャリア形成ができるよう大学と地域が連携したキャリアサポートの充実を図り、地域で活躍・定着する看護職者の育成に励み、地域の発展に貢献できるよう取り組んでいきます。

開学20周年記念事業プロジェクトに携わって

川内規会

私は開学と共に本学に参りました。青森に来た頃の、学年が揃わない寂しい教育環境や、大学周辺の何もなかった街並みも、今ではすっかり変わり、時代の変化を感じています。

大学と共にこの節目となる年を迎えることができ、教育を担う立場として、本学の次への飛躍に向けて身の引き締まる思いです。未来を担う地域社会に必要な大学として、本学のさらなる発展を祈念します。

開学20周年記念事業プロジェクトに携わって

市川美奈子

私が看護師として働いていた頃、初めてプリセプターをしたのが本学の1期生でした。当時からとても優秀だったことを覚えています。その後、教員になってたくさんの学生と出会い、成長していく過程に携わりました。20周年の節目を迎え、これからも、青森から世界へ向けて、更なる活躍をされる人材が巣立っていくことを願っています。



1年「実践基礎看護技術Ⅰ」食事の援助と口腔ケアの演習をしています。



2年「老年看護援助論Ⅰ」高齢者疑似体験中です。



3年「小児看護援助論」赤ちゃんの清潔ケアをしています。



3年「経過別看護実習」実習に向けて、シミュレーターで演習しています。



功労賞受賞のパメラ・ミナリク先生を囲んでいます。

Thank you to Aomori University of Health and Welfare. I am grateful and honored to be recognized at the 20th Anniversary Celebration with a Distinguished Service Award. It gives me great pleasure to come to AUHW every year to teach students, work with faculty and enjoy Aomori life. I am thankful to be considered part of this university.

- Dr.Pamera Minarik

さらに10年先を見すえて

学科長 神成一哉

私が本学に就任したのが2008年4月で、翌年の2009年に開学10周年記念式典を行っていたことを思い出します。10年は早いものです。これから10年後の30周年（2028年）の頃、大学はどうなっているのかなと思いをはせると、理学療法の進歩と実地診療のニーズの変化に合わせて、教育や実習の内容や方法が変わっているかもしれません。学生はもちろん、教える側の教員も顔ぶれが変わっていることでしょう。青森県の人口減少問題が克服されているかも気になります。私は外部から大学を見ていることになると思いますが、10年後もこれまでと変わらず、本学が学習意欲と希望に満ちた学生と、熱意を持って教育・研究に関わっている教員で活気にあふれていることを期待しています。

未来の主役達へ

李相潤

本学科は様々なご支援やご指導を頂き、今年で開学20周年を迎えることができました。心より感謝致します。理学療法学科は「ヒューマンケアと旺盛な探求心を有する学生の教育」を理念に尽力し、現在に至っています。その実は、卒業生に顕著に表れており、教育や指導が正しかったことを再認識させてくれます。これから未来を背負う主役達に一言。どんな時代でも「好奇心旺盛で優しい心を持ち、芯の強い理学療法士」になってほしい。遊び心は忘れずに。

開学20周年を迎え

長門五城

開学20周年を迎え、共に歩んだ約10年間を振り返ってみると、頭に浮かんでくるのが3つある。その3つとは、学生達のこと、私の家族のこと、そして東日本大震災のことである。学生も、家族も、被災された方々も、それぞれが心を砕き、皆が少しでも前に進めるよう相互理解に注力した10年だったように、私自身は感じている。では、次の10年で私達は何をどれだけ前進させることができているだろうか。心のこもった教育を祈念して。



物理療法の実習



ADL(日常生活動作)実習



トレーニング方法（運動学実習）



病院実習に向けて

開学からの20年を振り返って

学科長 大山博史

社会福祉学科は、開学以来、一貫して実践力のあるソーシャルワーカーの養成に力を入れてきました。近年、私たちを取り巻く福祉的な環境が徐々に変化しており、これに対応すべく社会福祉士養成のカリキュラムも6回の改正を重ねております。当学科では度重なるカリキュラム改正後も、身近な社会問題に目を向け、支援を必要としている人やその家族への働きかけを学び、また、地域で起きている問題に関心を向け、制度への働きかけまでを視野に入れつつ、実践に繋げる学習体系を組んできました。

最近の10年間、当学科で特筆すべきこととして、社会福祉士および精神保健福祉士の現役合格率が、毎年全国平均をはるかに上回っていること、そして、卒業生が施設や病院等の現場において、社会福祉士および精神保健福祉士の実習指導者として後輩の育成を担っていること、さらに、青森県の福祉職採用が始まった2014年からは、毎年卒業生が県職員として採用されております。卒業生は大学で得た学びを発展させ、実践に活かしていることと思います。これからも、地域の方々の課題の解決に寄与できるよう支援していきます。

友人とともに歩み続けた20年

葛西孝幸

私は本学の開学時に社会福祉学科1期生として入学し、社会福祉士を目指して友人とともに講義やゼミ、実習など様々な体験から専門性の基礎を学び、卒業後は医療ソーシャルワーカーとして病院に15年間勤務しておりましたが、今年の春20周年を迎えた本学に教員として着任しました。社会福祉士や精神保健福祉士を目指して勉学に励む学部生のカリキュラム内容では、社会福祉の本質的なところは以前と変わらないものの、Evidence based practiceにあるように社会福祉の中にも根拠が求められ、統計学などより多様な学習になっていると感じます。何かと忙しい学生生活ではありますが、対人援助職の素晴らしさや難しさを伝えながら、本学でできた友人が一生の友人になること、そして将来専門職としての仲間になることの喜びも伝えながら、実践力を身に付けた専門職の養成に努めていきたいと思っています。写真は平成29年度に開催した1期生の同窓会の1コマです。



「社会福祉基礎実習Ⅰ」
食事介助被介助体験風景(20期生)
食事介助・被介助体験を通してサポートについて経験的に学びます。



「介護技術論」実習風景(10期生)
高齢者・障害者の疑似体験を通して具体的なサポートのしかたについて学んでいます。



「社会福祉援助技術実習指導Ⅱ(現ソーシャルワーク実習指導)」風景(9期生)
高齢者・障害者の疑似体験を通して、サポートについて学び、実習に出ています。



「ソーシャルワーク実習指導Ⅰ」実習報告会風景(10期生)
実習で学んだことを発表して学びの成果を共有します。学生からの質問もさかんに。



「精神保健福祉援助実習Ⅱ」実習報告会 風景(16期生)
4年生の実習成果発表に精神保健福祉士をめざす3年生と実習指導者が参加し、実習での学びを深めます。

管理栄養士は天職である

学科長 今 淳

適切な量と質の食物を経口摂取し、消化吸収、代謝が正常に行われる場合に、我々は健康を維持できる。しかし、このプロセスに異常を来すと、病に侵されて死に至る。この様な状況では、医師による最高の医療を受けても完治は困難である。

このプロセスの異常を解決するのは誰か。その答えは管理栄養士という栄養専門職者である。プロセスを完璧に是正するプロであり、管理栄養士は正に天職である。従ってこの道を目指す学生には、誇りと気概を持ち、最高レベルの能力を提供できる人材へと成長するよう、教員全員一丸となって厳しく鍛え且つ応援してきた。

「草莽崛起」という吉田松陰の言葉がある。この言葉の様に、地方の一大学である青森県立保健大学から、高い能力を身に付けた志しを持つ学生が飛躍できるよう、20周年という節目を機会に、教員一同はもう一度気合を入れ直し、青森県民のみならず、日本国民、そして全世界の人類の健康長寿に多大な貢献ができる人材育成を目指し続ける所存である。

大学開学20周年と栄養学科開設10周年に寄せて

熊谷貴子

大学開学20周年と栄養学科開設10周年を、本学の教員として迎えらることができ大変嬉しく思います。私が、本学に着任したのは栄養学科開設の1年前です。当時の毎日は、栄養学科新設に向けての準備と整備に追われ、本当に新設されるのだろうかと半信半疑になることもあったように記憶しています。なぜ、青森県に管理栄養士養成校が必要なのか、嵯峨井勝先生が語られた熱い想いを忘れずに、今後も教育・研究活動に努力し県民の健康に貢献していきたいと思ひます。



「食品学実験Ⅲ」食品の分析、物性、官能検査等に関する実験を行います。



「栄養教育実習Ⅱ」集団を対象とした栄養教育を行います。



「調理学実習Ⅱ」管理栄養士の実践活動に必要な食事づくりにかかわる栄養と健康面を考慮した、安全で嗜好性の高い調理を行います。



「応用栄養学実習」ライフステージや、様々な環境条件下に応じた実践的な栄養マネジメントを展開します。



「生化学実験Ⅰ」生命現象に欠かせない酵素の活性測定、糖質や脂質の抽出と同定およびタンパク質の分離に関する実験を行います。



「教職実践演習」管理栄養士の専門性に加えて教職課程（栄養教諭）で学んできたことの集大成として、実際の教育現場における状況や課題への理解を深め、チームや学校の中でその専門性が発揮できるよう、理論や根拠を実際の指導に展開するための講義や演習などを行います。

大学院の紹介と進学のお誘い

—明日の地域の“健康と福祉”を担う研究者や高度専門職業人の育成をめざして—

研究科長 佐藤 伸

今年、大学は20周年を迎えました。一方、大学院健康科学研究科は、2003年に博士前期（修士）課程を、2005年に博士後期（博士）課程を開設し、15年目を迎えました。この間、昨年度3月までに博士前期課程では182人、博士後期課程では40人の学位を授与された卒業生を地域へ輩出しています。昨年度は、大学院のカリキュラムを新しくし、明日の地域の“健康と福祉”を担う研究者や高度専門職業人の育成をめざして、教育ならびに研究活動を進めています。

さて、本学大学院の3つの特徴をご紹介します。1つめは、他大学ではあまりみられない、多職種との連携や学際的研究を推進していることです。自分自身の研究テーマを持ちつつ、隣接する他の学問領域と連携して学際的研究を進めることは、実践の場において経験することになる「多職種との連携」とリンクするものといえます。このような研究教育を推進するために、表1に示した3つの研究領域ならびに専門看護師（Certified Nurse Specialist, CNS）コースを設けています。

2つめは、CNSコースのひとつとして、県内で唯一のがん看護のスペシャリスト（がん看護専門看護師）の養成コースを開設していることです。がん患者の身体的・精神的な苦痛を理解し、患者やその家族に対してQOLの維持向上の視点に立った水準の高い看護を提供できる専門看護師を養成します。

3つめは、大学院の講義・演習科目については、自らの研究課題やキャリアパスに応じて柔軟に履修できるようにしています。さらに、社会人が働きながら学べるように、土日や夜間の授業も開講しています。

このようなことから、本学大学院は、学部を卒業してさらに研究を進めたい人、また社会人として勤めつつも、人々の健康やより良い生活を支えるための研究をしたいという熱意を持っている人にとっても、将来のキャリアアップに最適な学びの場を提供できると確信しています。なお、今年の8月5日と12月8日に、本学にて大学院進学相談会を開催します。研究のこと、入学試験のこと、大学院生活のことなど、疑問に思うことがありましたら、是非、ご参加ください。ともに学び、研究する楽しさやわくわくする気持ちを共有できる皆様をお待ちしています。

表1 大学院の研究領域ならびにCNS（専門看護師）コース

	領域およびコース	取得できる学位・受験資格
博士前期課程（修士課程）	保健・医療・福祉政策システム領域	<ul style="list-style-type: none"> ・修士（健康科学） ・修士（社会福祉学） ・修士（看護学）
	対人ケアマネジメント領域	
	基礎研究・実用技術領域	
	CNS（専門看護師）コース	<ul style="list-style-type: none"> ・修士（看護学） ・専門看護師受験資格 （がん看護専門看護師または母性看護専門看護師）
博士後期課程（博士課程）	保健・医療・福祉政策システム領域	<ul style="list-style-type: none"> ・博士（健康科学）
	対人ケアマネジメント領域	
	基礎研究・実用技術領域	

※詳しくは、本学の大学院ホームページをご覧ください。



研究発表会での発表のようす



研究発表会での質疑応答のようす

記念式典・記念祝賀会

平成30年6月2日、本学講堂にて開学20周年記念式典が開催されました。

設立団体の長である三村知事や、弘前大学佐藤学長をはじめ、たくさんの御来賓の方々や、開学以来多大な御支援をいただいた多くの皆さまに御出席いただきました。また、教職員・学生等総勢350名が本学講堂に集まる中、「地域の“健康と福祉”の未来をリードする大学」としてあらたなスタートを切ることができました。

第2部の記念講演には、諏訪中央病院名誉院長鎌田實氏を講師に迎え、大変貴重な講演をいただき会場の皆様と有意義な時間を共にすることができました。



三村 申吾知事



コーラス・アカペラサークル



弘前大学学長 佐藤 敬 様



栄養学科4年 成田 晴蘭さん



社会福祉学科1期生 今 栄利子 様



理学療法学科1期生 工藤 洋平 様



看護学科1期生 萬谷 暁春 様



諏訪中央病院名誉院長 鎌田 實 氏

青森県立保健大学 開学20周年記念祝賀会

記念式典、記念講演のあとは、会場をホテル青森に移し、青山副知事、元理事の武田様より乾杯の御挨拶をいただき、祝賀会が開宴となりました。

出席した皆様それぞれが、これからの保健大学の姿や、20年間の思い出話に花を咲かせておりました。



上泉 和子学長



青山 祐治 副知事



武田 隆一 様 (元理事)



津軽三味線サークル



新道 幸恵様 (初代学長)



リポウィッツ よし子様 (第2代学長)

青森県立保健大学 20年の歩み(前編)(1999-2008)

開学まで



保健大学建設用地。奥に旧青森高等看護学院校舎(現在の教育研究C棟と学生棟)が見える。



建設中の様子。



完成した管理・図書館棟

1999(平成11年) 青森県立保健大学開学



●青森県立保健大学開学(入学式)



●新入生宿泊研修



●第1回公開講座

1999年(平成11年)に看護学科、理学療法学科、社会福祉学科の3学科で開学しました。
今も続く新入生宿泊研修や公開講座も開学とともにスタートしています。



2000(平成12年)



●English Communication 海外研修スタート



2001(平成13年)

看護学科に助産師コース設置

2002(平成14年)



●健康科学部1期生卒業



2003(平成15年)



●大学院博士前期課程スタート

●社会福祉学科に
精神保健福祉士コースを設置



●本学理学療法学科と
韓国仁済大学校物理治療科
との学科間国際交流開始
(5年後に大学間交流に発展)

2004(平成16年)



●認定看護管理者教育課程
セカンドレベル開講

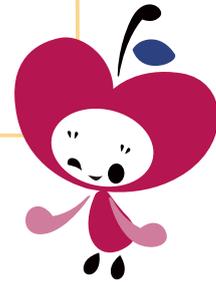
2005(平成17年)



●下北地域センター開所
●大学院博士後期課程スタート



●青森東高校との高大連携事業開始



大学院の開設や国際交流、地域貢献など、現在の保健大学の活動につながるものが、大学開設から5～6年の間に、次々と始まっていることがわかります。

2007(平成19年)



●日本家族看護学会第14回学術集会



●第12回日本難病看護学会

全国学会も
次々と本学で
開催されます。

2008(平成20年) 公立大学法人へ移行



●栄養学科の開設
●理学療法学科、社会福祉学科の定員増

開設から10年で、現在の基本的な体制が整いました。



20年の歩み(後編、2009-2018)は、第42号(冬号)に掲載予定です。お楽しみに!

開学20周年記念事業基金受入状況について

開学20周年記念事業基金 寄附者御芳名録

平成30年6月末時点の寄附合計金額は、6,082,000円となっております。

●法人

有限会社中谷電気
東京反訳株式会社
株式会社佐々木建設工業
株式会社藤本建設
千葉設備工業株式会社
シンエー空調株式会社
株式会社大坂組
株式会社阿部重組
株式会社青森銀行
株式会社青森日東義肢製作所
株式会社みちのく銀行
株式会社東洋社
株式会社サン・フレア
株式会社東奥アドシステム
医療法人松田会
青森放送株式会社
医療法人ときわ会
株式会社ヒグチ
株式会社成田本店
公益社団法人青森県栄養士会
株式会社 ソフトアカデミーあおもり

●個人

リボウィッツ よし子	藤田 修三	小山内 豊彦
森 文秋	松江 一	稲山 貴代
高谷 拓二	伊藤 日出男	川内 規会
高橋 稔	小山 敦代	嵯峨井 勝
栃木 智博	佐藤 しのぶ	山本 春江
高橋 道雄	倉田 富一	中村 恵子
成田 正行	千葉 直樹	大西 基喜
木村 恵美子	田中 訓	村田 隆史
井部 俊子	麻生 一男	藤本 幸男
小坂 一美	中村 耀	谷川 涼子
西塚 明子	宇佐美 大輔	今 淳
神 美喜雄	福田 道隆	今井 修子
駒延 菜月	山田 典子	葛西 孝幸
丸岡 淳	池田 和彦	山田 伸
芳賀 邦子	馬場 忠彦	乗鞍 敏夫
福澤 満博	傳法 裕一	杉山 克己
成田 淑子	丞村 宏	長根 祐子
関 清志	齋藤 長徳	笹 常春
佐藤 伶耶	牧 奈帆夏	寺田 泰二
山田 揚一	三浦 英人	鄭 佳紅
大串 靖子	斎藤 真紀子	吉岡 美子
菅原 博	大野 智子	
高橋 親木	倉内 静香	

平成29年12月1日～平成30年6月30日（御寄附年月日順、敬称略）
ご芳名の掲載を希望されない方につきましては、掲載しておりません。

開学20周年に寄せてメッセージを募集!

皆様からいただいたメッセージを「活彩! 保健大学だよりCampus Magazine第42号（開学20周年記念増刊号後編）」に掲載いたします。開学20周年に寄せたメッセージ、同窓生に向けたメッセージ、現況に関するメッセージ等幅広いテーマでお寄せください。

- 記載内容
- ①件名：20周年記念メッセージ
 - ②本文：140文字程度
 - ③氏名（※ペンネームでの掲載希望の方はペンネームも記載ください。）
 - ④本学卒業生の場合は卒業年度

宛先 message20@auhw.ac.jp 締切 11月末日

まだまだ募集中です!



編集後記

開学20周年記念事業プロジェクトリーダー 鈴木 孝夫

「21名」。私の手元に平成11年4月付け、所謂開学年度の教員紹介の冊子が――、開学後数年間は作成したのでしょうか。現在は広報誌LIVEの中で先生方を紹介しています。在職中お世話になりましたが、退職された先生方、他大学へ転出された先生方のお顔を改めて拝見させて頂き、当時の思いに沈んでおります。今も学内でお顔を合わせる先生方、冒頭の数字は、当時85名中、その先生方の数です。私もその一人として20周年を迎えました。

青森県立保健大学 開学20周年記念事業プロジェクト



公立大学法人 AOMORI UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

青森県立保健大学

〒030-8505

青森県青森市大字浜館字間瀬 58-1 電話 017-765-2000(代表)・FAX 017-765-2188 URL <https://www.auhw.ac.jp/>